

## 卷頭言

## 「表面科学」の発展のために

国森公夫



昨年の第14回表面科学講演大会の運営を担当したことから、卷頭言の執筆を仰せつかった。思い付くまでに、私見を述べさせていただくことにする。

会員数に比べて発表件数（一般講演116件）は少ない。開催時期（11月下旬）および場所（東京）などの事情も関係し、都合の良いものを厳選して発表するのであろう。しかし、講演件数が増えれば良いというものでもない。会場数が増え、並列セッションになると、本学会の特徴が失われる可能性がある。本学会員は、応物、化学、物理、触媒、真空、金属などの古くからある学会の会員もある。筆者の専門とする「表面化学」分野を例にすれば、触媒化学、表面反応化学、表面物理、応用物理、電気化学、理論計算科学などの専門の異なる研究者が一同に会し、新しいテーマ（たとえば、「表面反応ダイナミックス」などの萌芽的な学問領域）について討論することはたいへん意義深い。本学会が特徴のある学会として発展し存在意義を發揮するには、一つには、萌芽的、境界領域的な研究を育てる場としての役割があるのでないだろうか。

企業からの発表件数と全発表件数との比は、約25%である（共同研究もあるので正確な数字ではないが）。学会によっては10%以下の場合もあるし、50%近い学会もある。本学会の場合、この数字はもっと増えて良いのではないだろうか。産・官・学のさまざまなニーズをとらえて、発展性のある技術分野や表面を共通とする境界領域に関するテーマを創り出していくことが重要であると思う。

会誌「表面科学」は、原著論文として投稿できるのが一つの特徴であり、特に講演大会での発表者に投稿を勧誘している。「これはと思える力作は、サーキュレーションの良い国際誌に投稿する」などの批評はあるが、和文論文誌としての評価は高く、境界領域の分野を育てるためにもそれなりの存在意義があるのではないか。国際的評価を少しでも高めるには、英文による論文・速報・ノートの数が増えれば良いと考えるが、解説論文などとのバランスも考える必要もある。

学会の長期的運命はその名前で決まるともいえる。幸いなことに「表面科学」は、基礎・応用も含めた表面に関する広い範囲の学問分野に関係し、その将来的見通しは明るい。日本における「表面科学」の発展のために、本学会の役割は重要と考える。

（筑波大学物質工学系）